

ムクロジの果実と種子です。小石川植物園の地面に落ちていたもので、左上に見える半透明の飴色の部分が果皮、右側の黒く丸いものが内部の種子です。果皮は熟すと黄褐色から茶色になり、乾燥するとしわが寄ります。触るとやや粘り気があり、この部分にはサポニンが多く含まれています。昔の人々はこの果皮を水に浸して揉み、天然の石けんとして利用しました。現在でも「ソープナッツ」として知られ、環境負荷の少ない洗浄素材として見直されています。

ムクロジの種子は非常に硬く、黒い漆を塗ったような光沢があります。写真でも、地面に落ちて土が付着しているにもかかわらず、なお独特の艶が感じられます。この黒い種子は、古くから羽根つきの羽根の玉として利用されてきました。正月の羽根つきで「カチン」と乾いた音を立てる黒い玉の正体が、まさにムクロジの種子です。また数珠や細工物、玩具などにも利用され、日本人の暮らしの中に深く入り込んできた植物でもあります。

ムクロジは夏に目立たない淡黄緑色の花を咲かせますが、秋になると枝いっぱいに果実を实らせませす。そして冬、葉を落としたあとも果実だけが残ることがあり、裸木に黄褐色の実がぶら下がる姿はなかなか印象的です。小石川植物園では、こうした果実が地面に落ち、果皮と種子が分かれた状態を観察することができます。植物園は花の美しさだけでなく、このように「植物がどのように種子を残し、次世代へつないでいくか」を具体的に見せてくれる場所でもあります。ムクロジの実は、その構造と利用の歴史を同時に語ってくれる、たいへん興味深い果実です。

(2026年5月中旬／文京区小石川植物園内)

